

## 〈つながり〉の転換——災害による喪失と再生を手がかりとして

松井 克浩

### 1. 「引き裂かれた地域」

東日本大震災と原発事故による深刻な放射能汚染に苦しむ福島県では、復興への足がかりさえつかめない地域が広範に存在している。原発周辺の浜通りの自治体の多くが避難対象区域に指定され、住民は福島県内外への避難を強いられた。

放射能汚染を意識せざるを得ない多くの住民が、避難するかどうか、避難するとすればどこへ避難するか、いつ従前の居住地に帰還するか、あるいは帰還せずに避難先に定住するか……といったことを選択しなければならない。原発事故は、「それまで定住圏のなかに一体となって存在していた「多面的な機能」」をバラバラに解体してしまい、「住民がそれらの諸要素の間で理不尽な選択を迫られている」。こうした事態を、除本理史は「引き裂かれた地域」という言葉で表現している（大島・除本 2012）。

震災から時間がたつにつれて、とりわけ広域避難を強いられた人びとが「社会的分断」にさらされていることが明らかになってきた。避難元や避難先の相違、家族のなかでの世代や性別の相違、職業や賠償の相違などにより、「個人レベルでの人間関係の齟齬、破綻、対立といった感情的、社会関係的な側面から、補償や賠償における区別や格差の発生といった制度的な側面の双方」にわたって分断が生じるのである（山下ほか 2012）。避難者は避難を強いられているだけで困難にさらされているのに、その内部での格差や分断に直面し、さまざまな「理不尽な選択」を強いられている。

### 2. 関係と時間にかかれたコミュニティ

福島県富岡町では、原発事故によりすべての住民が故郷を離れた避難生活を余儀なくされている。この町の小中学校のPTA関係者を中心とする住民有志が、2012年2月に「とみおか子ども未来ネットワーク」という市民団体を作った。およそ1万6千人の富岡町民が、福島県内の他地域を含む全国に散らばって暮らしている。「子ども未来」の中心メンバーたちは、住民同士で話し合い、意見を述べる場がないまま、避難指示区域の見直しなどが一方的に決められていくことに危機感を覚えていた。そこで、全国各地で富岡町民の意見交換の場（タウンミーティング）を設ける活動に取り組んでいる。

その背景にあるのは「何年かかっても何百年かかっても私達の古里である富岡町のバトンを未来に繋げたい」という思いである。子育て世代を中心とした運動であるが、自分の子どもを守るだけでなく、「町の子ども」の未来を考えようとしている点が重要だろう。タウンミーティングの参加者からも、子育てを地域で、町ぐるみで行ってきたことが繰り返し語られた。「町で子育て」というのも、富岡の人びとにとっての、重要な「場所の記憶」なのである。こうした共通の基盤に立つことによって、広域に分散し、さまざまな利害を背負った「町民をつなぐ」ことを目指している。

### 3. 〈つながり〉の転換

コミュニティは、意味づけをめぐる闘争の場でもある。一方では、自由競争と自己責任が強調され、たとえば効率性の悪い山里の暮らしは否定される。他方では、コミュニティや「ご近所の底力」が過度に強調され、行政機能の丸投げや住民のタテ関係の系列化がはかれるだろう。その双方を回避するためには、開放性や異質性、創発性、動態性といった要素が重要になってくる。

そのために必要なことは、第一に、風通しのよい関係づくりであろう。たとえば、どこに住んでいても町民であるという一点でつながり、分断を乗り越えようとするところである。離脱する自由、出入りする自由を確保した上で、ゆるやかなつながりの維持をはかることが重要であろう。

必要なことの第二は、長期的な時間の展望である。コミュニティのメンバーを現行世代で完結させて考えるのではなく、次の世代、その次の世代…を視野に入れ、世代を超えたつながりを構想するのである。当面の暮らしの維持・再生という緊急性のある課題と同時に、故郷の町の再生を展望することである。そのさい、富岡の桜並木などの「場所の力」は、大きな役割を果たすだろう。それは「かけがえのなさ」を想起させ、人びとを長期にわたってつないでいくシンボルになりうる。人びとの暮らしを支えるとともに、流れに抗して誇りと人権を守る手がかりにもなりうるのである。

#### 参考文献

- 1) 大島堅一・除本理史『原発事故の被害と補償—フクシマと「人間の復興」』大月書店、2012年
- 2) 山下祐介、他「原発避難をめぐる諸相と社会的分断—広域避難者調査に基づく分析」『人間と環境』38(2)、2012年
- 3) 「とみおか子ども未来ネットワーク」設立趣意書、2012年

[付記] 本稿は、松井克浩「場所」をめぐる感情とつながり—災害による喪失と再生を手がかりとして」栗原隆編『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ出版、2013年、を再編集したものである。詳しくは本論文をご覧ください。